



平成26年10月15日  
内閣府（防災担当）

## 大規模地震時の電気火災の発生抑制に関する検討会（第1回） 議事概要について

### 1. 検討会の概要

日 時：平成26年9月10日（水）15：00～17：00

場 所：中央合同庁舎第8号館8階 特別大会議室

（出席者：関澤座長、久田、秦、飛田、谷部、吉田、藤倉、伊藤、早田、安部各委員、  
全国消防長会、東京消防庁、世田谷区、横浜市、茅ヶ崎市、  
日原政策統括官、佐々木官房審議官 他）

### 2. 議事概要

配付資料1から6について、事務局、秦委員より説明が行われた後、各委員に御議論いただいた。

委員からの主な意見等は次のとおり。

- 現在、家屋に設置されているブレーカーは様々で、家屋についても築後50年を経過したものもあれば新築のものもある。既存のブレーカーに後付けする際には、様々なタイプのブレーカーがあることに配慮しておくことが必要。
- 感震ブレーカー等は、製造会社及び商品が少なく市場が成熟しているとは言えず、性能評価や試験は重要と考えられる。
- 消防で実験を行った際、衣類などがストーブに落下した場合の発火には5分程度の時間を要していたため、3分間の待機時間があっても、感電ブレーカーにより出火を抑制する効果があるのではないかと考えられる。
- 東日本大震災においては、電力会社では、復電・送電の際に個別の需要家の安全確認を行った上で復電するようにしており、復電を原因とした火災の発生抑制には大きな効果があったと考えられる。
- 参考資料1にあるように、阪神・淡路大震災後に電気製品側で考えられる出火防止対策について検討し、普及に努めたことから、新しい製品については対策が施されたものが販売されていると考えられる。
- 対策がなされた製品への買い換えの促進も重要。
- 感震ブレーカーのみならず、多重の予防を行うことが重要で、対策機器による予防も

その一つと考えられる。

- 落下物により、電気ストーブのスイッチが入り出火したという通常では考えられない事例もある。装置側の対応だけでは難しいケースもあるのではないか。
- 遮断する箇所を図式的に示し、どの部位で遮断を行い、どこから先の出火防止を行うのか、整理できればありがたい。
- コンセントタイプは現実的で良いと感じる。コンセントタイプのデメリットとして屋内配線の火災に効果がないとされているが、屋内配線の損傷を起因とした火災の発生確率との兼ね合いになるかもしれない。
- コンセントタイプはユーザーが取り付けやすいタイプなので、普及方策の検討の際には様々な選択肢の一つとして位置づけるということが大切である。
- ガスマイコンメーターの規格を感震ブレーカーの参考とする話があるが、ガスマイコンメーター感震装置の作動後、復帰方法がわからないとの問合せが多かったとも聞いている。
- 性能評価基準は性能が確保されているかという観点で整理されているが、高齢者や障がい者等に配慮し、ユニバーサルデザインの考えも取り入れてほしい。また、過去の別件の調査で、ブレーカーが切れる前に音声通知を望む意見があり、60代以上では過半数に達していたという結果がある。高齢者にとって電気が突然切れるのは大変不安である。  
さらに、電気遮断からの復帰のしやすさ等も考えるべきポイントではないか。製品によって価格差はあるだろうが、価格に見合っているかどうか、感震性能のみでなく全体で考えるべきではないか。
- 感震ブレーカーの機能を考える上で、高機能を付加することは高価となり普及を阻害してしまうという課題がある。機能と価格はトレードオフの関係にあるため、ある程度の範囲で折り合いをつける必要があるだろう。良い製品のためには、消費者も勉強してもらう必要がある。

<本件問い合わせ先>

内閣府政策統括官（防災担当）付

調査・企画担当 参事官補佐 田村 英之  
主査 杉本 正和

TEL : 03-3501-5693(直通) FAX : 03-3501-6820